

国立天文台
【コクリツテンモンダイ】

核融合科学研究所
【カクユウゴウカガクケンキュウシヨ】

大学共同利用機関法人 SINCE 2004

自然科学
【シゼンカガク-ケンキュウキコウ】
研究機構

基礎生物学研究所
【キソセイブツガクケンキュウシヨ】

分子科学研究所
【ブンシカガク-ケンキュウジヨ】

生理学研究所
【セイリガク-ケンキュウシヨ】

日本語

English

自然科学研究機構 要覧

2024-2025 GUIDE

NAOJ
National Astronomical Observatory of Japan

NINS
National Institutes of Natural Sciences

Inter-University Research Institute Corporation SINCE 2004

National Institute for Basic Biology

NIFS
National Institute for Fusion Science

NIPS
National Institute for Physiological Sciences



機構長挨拶

川合眞紀



自然科学研究機構は、国立天文台、核融合科学研究所、基礎生物学研究所、生理学研究所、分子科学研究所の5つの研究機関で構成されており、宇宙、エネルギー、物質、生命等に関わる自然科学分野の中核的研究機関として、

な分野の創出を見据えれば、機構内の閉じた発展は限定的であり、大学共同利用機関法人全体や共同利用・共同研究拠点を含めた大学との連携が不可欠です。このため、4つの大学共同利用機関法人と総合研究大学院大

保有する最先端設備の共同利用や先導的共同研究の場を大学共同利用機関として全国の大学・研究機関の研究者に提供するとともに、研究者コミュニティの総意の下、各研究所の役割と機能の充実を図り、それぞれの専門分野における最先端研究を推進してまいりました。

学の連携により設立された大学共同利用研究教育アライアンスや、研究力強化に取り組む国公私立大学及び大学共同利用機関法人で構成する研究大学コンソーシアムなど、その取組みはすでに始まっています。また、令和4年度から令和9年度までの第4期中期目標期間の6年間は、大学共同利用機関の将来のあり方が更に問われる重要な期間であると捉えています。

大学共同利用機関は平成16年の法人化により4つの機関に再編され、自主的・自律的に教育研究を行う機関としての位置付けが強化されましたが、本来は異なる研究者コミュニティを背景に持つ各研究所の有機的な連携と、機関総体として社会的使命を果たしていくことの双方の舵取りが極めて重要です。加えて、大学共同利用機関は独創的な研究を展開する基盤を提供するものであり、我が国の研究者が水準の高い研究を創出し続けることを支える役割を担っており、大学を中心とした研究者コミュニティとともに繁栄することがその使命です。

技術革新や社会革新を通じて誇りある未来に向かうには、高等教育人材の活用促進が欠かせません。研究者コミュニティを先導する機関として、自然科学研究機構は科学を通じて、高等教育の重要性や社会への高等教育人材の浸透を促す活動に寄与していきます。

引き続き、自然科学研究機構にご支援とご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

自然科学研究機構長

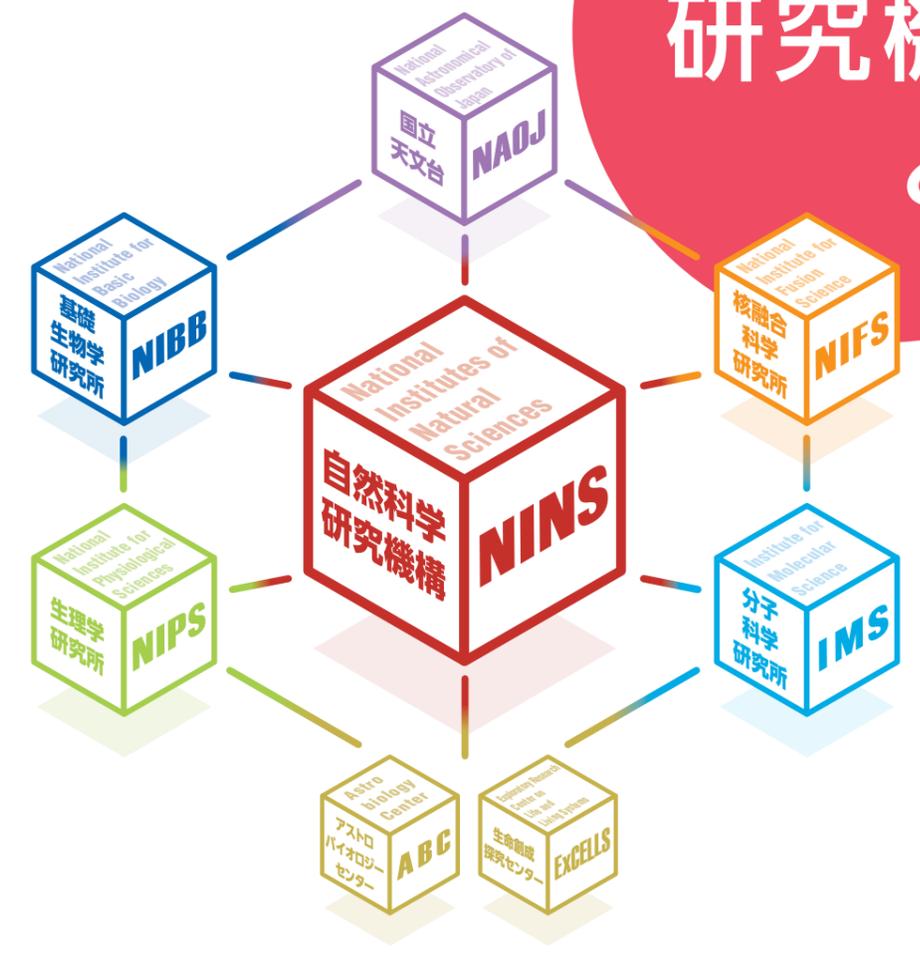
川合眞紀

自然科学研究機構は、天文学から脳科学までの幅広い学術領域の研究を推進し、構成機関である5つの研究所はそれぞれ異なる学術分野を基盤とする研究者コミュニティを有しています。学術の広がりや学際的な新た

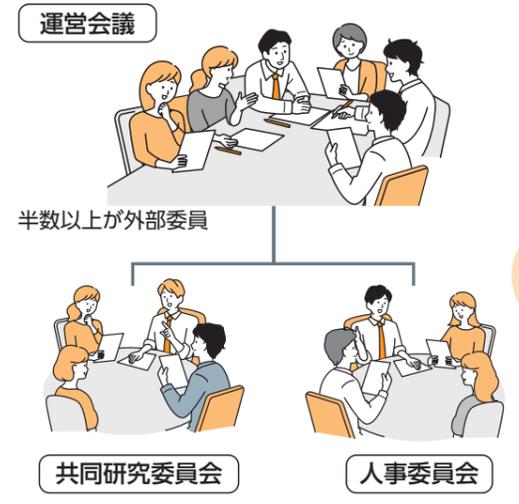
Makiko Kawaguchi

J36	J35	J34	J33	J31	J29	J27	J25	J19	J17	J16	J15	J13	J11	J09	J07	J05	J04	J03	J01	目次	
			⑥ 組織図／沿革 各種データ 名簿 住所／ご寄附のお願い					⑤ 自然科学研究機構の目指すこと 共同利用・共同研究を通じた大学とのかかわり OPEN MIX LAB (OML) 事業 国際共同研究の推進 NINSの産学連携について 国民・地域とのつながり	④ 共同利用・共同研究 所在地		③ センター紹介 アストロバイオロジーセンター 生命創成探究センター		分子科学研究所 生理学研究所 基礎生物学研究所 核融合科学研究所 国立天文台				② 研究所紹介	① 自然科学研究機構とは 研究者コミュニティを支えられた研究所の運営		機構長挨拶	

自然科学研究機構とは



例：核融合科学研究所の場合



研究者コミュニティに支えられた研究所の運営

自 然科学研究機構 (National Institutes of Natural Sciences: NINS) は、宇宙、エネルギー、物質、生命等に係る大学共同利用機関(国立天文台、核融合科学研究所、基礎生物学研究所、生理学研究所、分子科学研究所)と直轄センター(アストロバイオロジーセンター、生命創成探究センター)を設置・運営し、世界を牽引する最先端研究を推進する、自然科学分野の国際的研究拠点です。自然科学研究機構に所属する5研究機関と直轄センターは、全国の大学・研究機関の研究者に対し、共同利用・共同研究の場を提供し、日本の大学・研究機関の研究力強化と新たな研究分野の創成に大きく貢献しています。

自 然科学研究機構を構成する大学共同利用機関は、運営会議や共同研究委員会、教員の人事委員会などへ、大学・研究機関に所属する、各研究者コミュニティを代表する研究者に多数ご参画いただいています。

特に、共同研究を採択する委員会は、構成員の半数以上が外部委員で構成されており、各々の研究分野に根ざした運営が行われています。また機構長選考・監察会議は、構成員の大半が外部委員から成るほか、経営協議会は半数以上、教育研究評議会は約半数が外部委員で構成されています。

天文学は人類最古の学問のひとつです。そこには、宇宙の構造を知ることを通して、自らの成り立ちを明らかにしたいという、人類が持つ根源的な欲求が込められています。国立天文台は、常に新しい観測手段に挑戦し、地球・太陽系天体から太陽・恒星・銀河・銀河団・膨張宇宙にいたる宇宙の諸天体・諸現象についての観測と理論研究を深めることによって、人類の知的基盤をより豊かなものとし、宇宙・地球・生命を一体として捉える新たな自然観創生の役割を果たしたいと考えています。



M87銀河中心のブラックホールシャドウ。アルマ望遠鏡もこの観測に参加しました。
(Credit: EHT collaboration)

National Astronomical Observatory of Japan

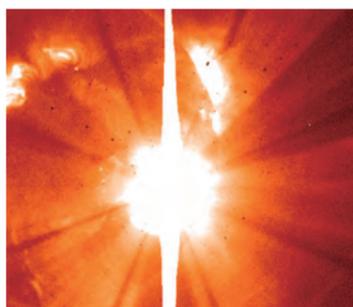
アルマ望遠鏡空撮
(Clem & Adri Bacri-Normier(wingsforscience.com)/ESO)

研究トピックス

01

太陽観測衛星「ひので」が見た太陽

太陽観測衛星「ひので」は、2006年の打ち上げ以来10年以上にわたって、太陽の活動を観測し続けています。私たちに最も近い恒星である太陽は、地球で生命が育まれるために不可欠な存在であるとともに、私たちの活動や環境に多大な影響を及ぼしています。「ひので」のデータは観測後すぐに公開され、世界中の太陽や宇宙環境の研究に役立っています。

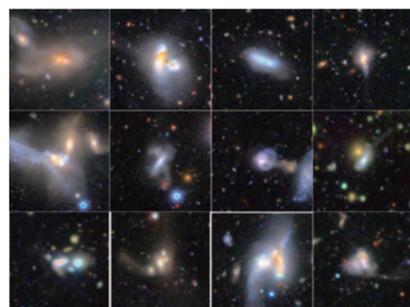


2024年5月11日(日本時間)に発生したX5.8クラスの大規模フレア
(Credit: 国立天文台/JAXA/MSU)

02

市民と協力して発見した激しい合体の瞬間にある銀河

すばる望遠鏡の超広視野主焦点カメラHSCが捉えた広大な宇宙画像に写りこんだ銀河を、市民が分類して研究に参加する「市民天文学」プロジェクトGALAXY CRUISEが2019年に始めました。最初の2年半で、約1万人の市民天文学者による合計266万件以上の分類が集まりました。その結果を解析することで、発見が難しい、激しい合体の現場にある銀河が多数見つかりました。天文学者だけではなし得なかった成果です。



激しい合体の瞬間にある銀河例
(Credit: 国立天文台)

核融合科学研究所

プラズマを閉じ込める真空容器内部

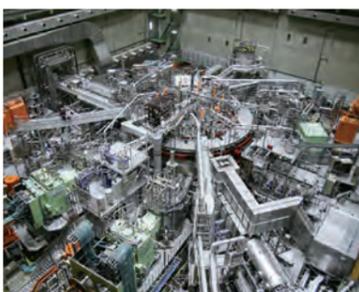
核融合は宇宙における元素合成とエネルギー発生の基本的メカニズムであり、星の活動を支えるエネルギー源になっています。私たちの地球環境も太陽の核融合エネルギーによって維持されています。核融合科学研究所は、核融合エネルギーを私たちが利用できる形で実現するために必要となるプラズマ物理をはじめ、ミクロな量子プロセスや材料科学、装置を構成する機器の工学技術まで、様々な研究課題に取り組んでいます。大学共同利用機関として、大型ヘリカル装置(LHD)やスーパーコンピュータなど、大型の研究施設をはじめ、様々な研究装置群を共同利用に供し、国内外の大学や研究機関との共同研究を進めることで、核融合科学の発展とともに、広く科学技術の基盤形成を推進しています。

National Institute for Fusion Science

研究トピックス

01 学術研究基盤としての大型ヘリカル装置

大型ヘリカル装置(LHD)は、世界最大級の超伝導プラズマ閉じ込め実験装置です。超高温プラズマを安定に生成できるLHDにおいて、多様な高精度計測装置を用いてプラズマの内部構造を計ることに伴って、核融合に限らず宇宙・天体プラズマにも共通する様々な複雑現象の原理に迫る国際共同研究を実施します。



LHDの全景。直径13メートル、高さ9メートルのLHD本体の周りには、プラズマの加熱装置や計測装置が多数配置されています。

02 プラズマの計算機シミュレーション

核融合プラズマ中には、構成粒子である電子やイオンの運動に起因したミクロスケールの現象から、それらが集団として動くことにより生まれる装置サイズのマクロスケールの流体現象や、輸送現象までの多数の異なる時間スケールをもつ現象が混在しています。これらの複雑な現象をスーパーコンピュータの中に再現し、核融合プラズマ現象を支配する物理法則の理解、更には装置規模でのプラズマ挙動を予測することを旨としたシミュレーション研究を行っています。



プラズマからの熱・粒子を受け止めるダイバータ材料の内部で、水素が拡散する様子のシミュレーションを可視化しています。

宇宙にある無数の星の中で地球の最大の特徴は、多種多様な生物に満ちていることです。約40億年の年月の間に、生物は多彩な姿と驚くような能力を獲得し、子孫をふやしてきました。基礎生物学研究所は、遺伝子・細胞・組織・個体・異種生物間の相互作用など、多階層における研究技術・手法の開発を推進し、多くの生物に共通する基本的な仕組み、生物が多様性をもつに至った仕組み、及び生物が環境に適應する仕組みを解き明かす研究を、国内外の研究者と連携して行っています。



研究対象の様々な生物たち

研究トピックス

01 超階層生物学の推進

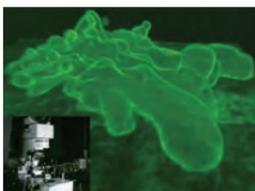
生物が示す現象は、遺伝子から個体群にいたる各階層の複雑なネットワークの総和として現れるため、生物現象の本質的な理解には階層を超える解析が必要です。しかし、多階層の時空間スケールにわたる各種のデータを統合して解析するには、人間の処理能力に頼った解析だけでは限界があります。そこで、基礎生物学研究所では、2022年4月に超階層生物学センターを設立し、AI解析を導入して人間の認知能力では処理できない多階層にわたる膨大なデータをシステムとしてつなぎ、生命現象を理解する「超階層生物学」を推進しています。



超階層生物学センター

02 統合バイオイメーjing

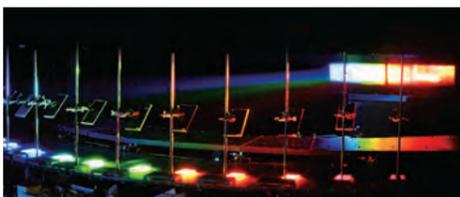
基礎生物学研究所では、光シート顕微鏡技術、二光子顕微鏡、IRILEGO顕微鏡等の先端顕微鏡を用いた観察および光操作技術の高度化をはかるとともに、取得された画像を解析する画像処理技術および統計処理のための新規画像解析技術開発を進めています。また、共同利用研究や、先端バイオイメーjing支援プラットフォーム(A-BIS)を通じて、実験デザイン、画像取得からデータ解析までを統合的にサポートする活動を、国内外の研究者に向けて提供しています。



光シート顕微鏡で捉えたアメーバの動き

03 大型スペクトログラフで光と生物との関係性を探る

大型スペクトログラフは、世界最大の大型分光照射施設で、波長250〜1000ナノメートルの紫外・可視・赤外光を全長約10メートルの馬蹄型の焦点局面に分散させ、強い単色光を照射することが可能です。光合成の調節機構や光受容体の機能解析など、光の波長と生物の反応と関係性を調べる研究に活用されています。



大型スペクトログラフ

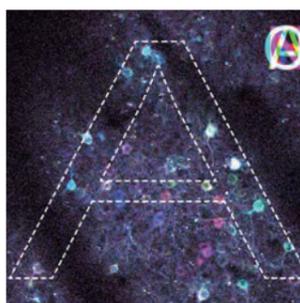


生理学研究所は、ヒトのからだ、とりわけ脳の働きに関する最先端の研究を推進し、国内外の研究者と共同研究を行い、大学院生を含む若手研究者の育成を行う研究機関です。分子・細胞からヒト個体のレベルに至る様々なからだの仕組みを理解する多様な研究を支えるため、多くの世界最先端の測定装置が設置されています。生理学研究所は、これらの計測機器の測定・解析技術の向上に努め、国内外の研究者へ装置と測定技術を幅広く供することによって、日本の生理学研究の中核を担っています。

研究トピックス

01 2光子ホログラフィック顕微鏡による細胞計測・操作

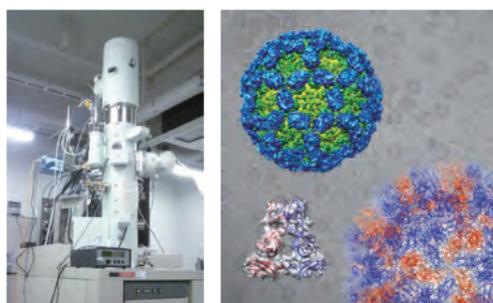
デジタルホログラフィック技術と2光子顕微鏡と組み合わせて構築した顕微鏡。レーザーを自在な形で照射することが可能です。これを光遺伝学による細胞活動操作法(オプトジェネティクス)と組み合わせ、照射した細胞活動の計測・操作を生体動物で行うことができます。これによって炎症性疼痛モデルの痛み細胞の同定や、パターン刺激から痛みが慢性化する際の神経回路の特徴、さらには局所神経回路の機能結合強度の変化を明らかにしました(Okada et al., Sci. Adv., 2021)。



生体マウスにおいて、文字の形に細胞活動を誘導した例 (X. Quan et al., Opt. Lett., 2018)

02 位相差クライオ電子顕微鏡

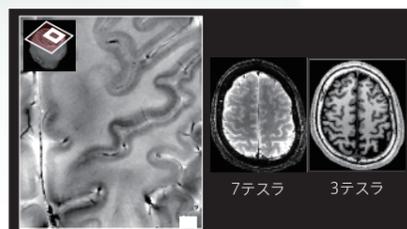
タンパク質粒子やウイルス、細胞小器官などの生物試料を急速凍結により厚さ数ナノメートルの非晶質の氷に包埋し、凍ったまま高真空の電子顕微鏡内に装填して最小量の電子線で観察します。このような少ない電子線量による無固定・無染色の生物試料の電顕像は、コントラストが低くなるため、必要に応じて電子顕微鏡用位相板を挿入して位相コントラストを回復します。



低温位相差電子顕微鏡と撮影されたサポウイルスキャプシド(殻)の画像(背景) 手前は構造と分子モデル



7テスラ超高磁場磁気共鳴画像装置



7TMRIで撮影したヒト脳
100マイクロメートル単位の血管や神経を描出

National Institute for Physiological Sciences

Institute for Molecular Science

研究トピックス

01

「分子」と「分子システム」をつなぐロジックを解析し、斬新な分子システムを創成する

協奏分子システム研究センターでは、「分子それぞれの性質が高次構造を持つ分子システムの卓越した機能発現にどう結びつくのか」という学問横断的な重要課題に取り組んでいます。生命システムを手本に「個」と「集団」を結び階層ロジックを学び、分子システムがエネルギー・情報を協奏的に交換することによって物質変換・エネルギー変換・生命的活動などの諸機能を発現する原理の解明を目指しています。「柔軟かつ堅牢で卓越した機能を持つ分子システム」創成の拠点として共同利用・共同研究を推進し、学問や社会へ貢献することを目的としています。

シアノバクテリアの生物時計システム
Cyanobacterial Circadian Clock System

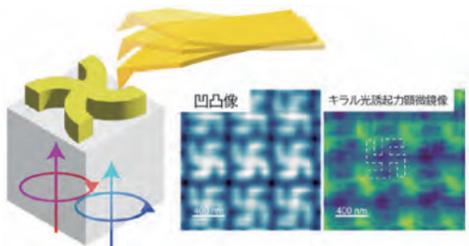


シアノバクテリアの生物時計システム

02

光で、分子の姿を捉える

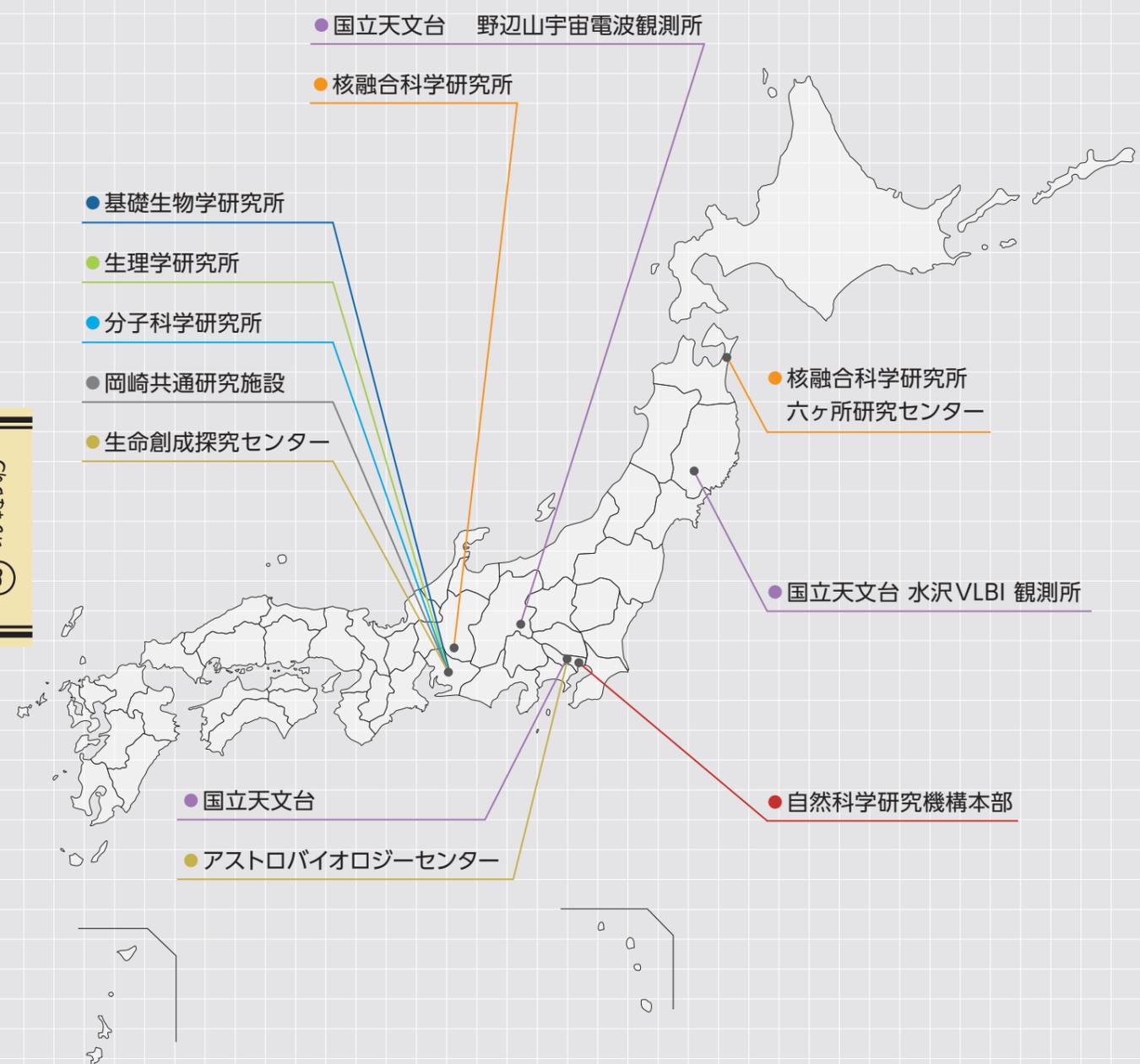
分子がその機能を発揮する場の多くは、分子が単一のものとして存在しているのではなく、いくつもの種類の分子が集まり、分子のミクロな性質と集団としてのマクロな性質が影響を及ぼし合っており、特徴的な機能を発現しています。このようなミクロとマクロの性質が影響を及ぼし合う時間・空間領域(メソスコピック領域)の特性を解明・制御・開拓していくには、メソスコピック領域の計測法を独自に開拓し、様々な系に適用することが重要になります。メソスコピック計測研究センターではこの目的を念頭に、理論解析、光源開発、そして新たな計測法開拓、それらの応用までを含めた基礎研究基盤の提供を目指して活動しています。



開発した光誘起力顕微鏡 (PiFM) によるキラル金ナノ構造材料のキラル光学効果イメージ

極端紫外光研究施設 (UVSOR)

分子科学は、分子がその姿を変化させる化学反応や分子間相互作用の本質を、理論と実験の両面から明らかにすることを目的とした学問です。分子科学研究所では、理論・計算・光・物質・生命・錯体を扱う4つの基礎研究領域に加えて、協奏分子システム研究センター、メソスコピック計測研究センターを設置し、最先端の技術や装置が利用できる共同研究の場を国内外の研究者に提供し続けています。また、全国の72国立大学法人と連携し、大学の公的研究機関・民間企業の研究者が各参加組織の所有設備を安価に共同利用できるシステム(大学連携研究設備ネットワーク)を構築しています。



ハワイ

国立天文台 ハワイ観測所

● すばる望遠鏡

● ヒロ・オフィス

チリ

国立天文台 チリ観測所

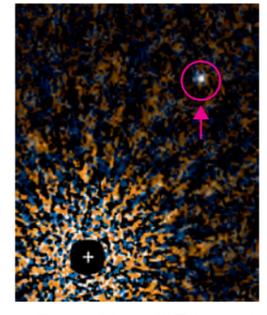
● アルマ望遠鏡 山頂施設

● サンティアゴ・オフィス



アストロバイオロジーセンター

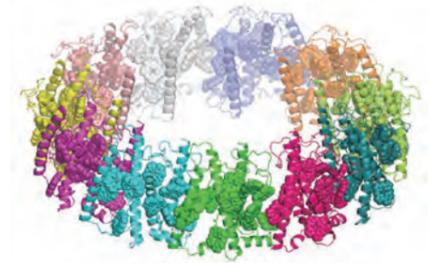
アストロバイオロジーセンター(ABC)は、太陽系外惑星や、宇宙にいてもいい生物についての学際的研究を推進するために、2015年に設立されました。近年の太陽系外惑星観測の進展を契機に、「宇宙における生命」を科学的に調査し、その謎を解き明かすアストロバイオロジーの研究が喫緊の課題となっています。自然科学研究機構のアストロバイオロジーセンターは、異分野融合によりこの分野を発展させ、太陽系外の惑星探査、太陽系内外の生命探査、それらの探査のための装置開発を推進しています。



木星の4倍程度の質量を持つ系外惑星GJ 504 b(右上)



生命を宿せる系外惑星を探査する赤外線分光器IIRD



南極の藻類が赤外線で光合成をするために使われるタンパク質の構造

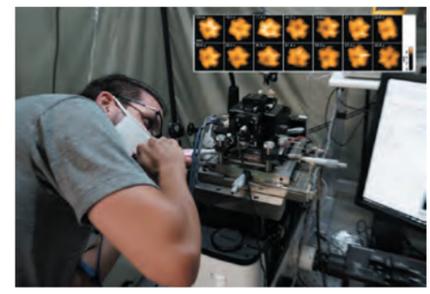
お問い合わせ窓口
abc-office@abc-nins.jp

Astrobiology Center



生命創成探究センター

生命創成探究センターは「生きていくとは何か?」という人類の根源的な問いの解明に向けて、生命の本質の理解を目指した研究を進めるべく、2018年4月に設立されました。最先端機器で生物を観察し(みる)、最新手法でデータを解析して(よむ)、生命の仕組みの解明を目指します。さらに構成的アプローチを取り入れ(つくる)、生命システムの本質に迫ります。「みる・よむ・つくる」のアプローチを基軸に、極限環境生命の研究者とも協力しながら、異分野融合型の研究を進め、生命の設計原理を探究しています。



高速AFM/光学顕微鏡複合機によってタンパク質から細胞まで様々な生体分子の動態が可視化できます。また、光学顕微鏡との組み合わせも可能です。



電子顕微鏡で撮影したクマムシ

お問い合わせ窓口
info@excells.orion.ac.jp

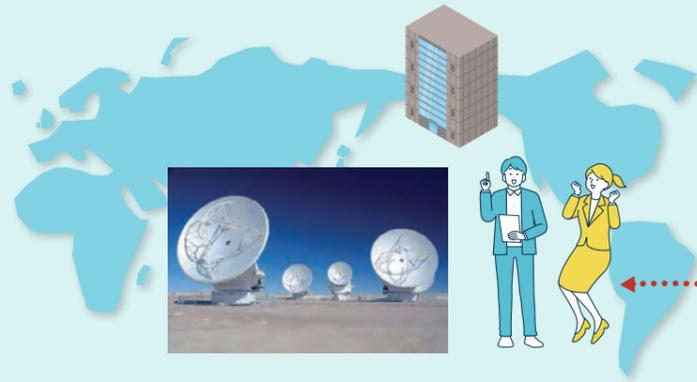
Exploratory Research Center on Life and Living Systems

共同利用

共同研究

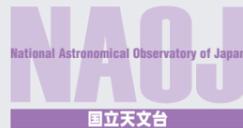
③ 国際共同研究

国際的な研究拠点として、国内外の大学や研究機関の人材交流のハブとなり、国際研究プロジェクトの実施や国際共同研究を推進するとともに、研究者間の活発な交流を支援しています。



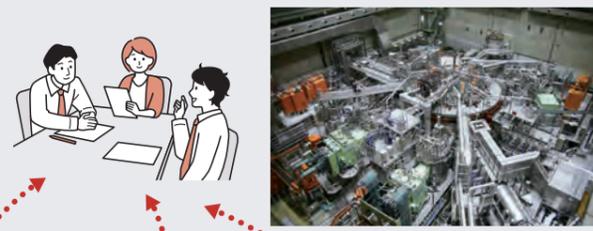
NINS

National Institutes of Natural Sciences
自然科学研究機構



① 大学の枠を越えた 共同利用・共同研究

個々の大学で設置・運用が困難な大型最先端研究設備の整備や、収集・保管等が難しい研究資料等の収集を行い、日本全国で実施されている最先端研究の基盤を支えています。このため自然科学研究機構の各研究機関には、全国の国公私立大学や研究機関から研究者が多数集まり、所属の枠を越えた共同利用・共同研究が日々行われています。



ハブ機能



② 大学に直接貢献する ネットワーク型共同研究

それぞれの学術分野の特性に応じて、複数の大学や研究機関からなる研究ネットワークを構成し、共同利用・共同研究の推進および人材育成を行っています。



自 然科学研究機構は、大学共同利用機関法人として、大学の研究力強化に貢献するため、それぞれの学術分野の特性を活かしながら、①大学の枠を越えた共同利用・共同研究、②大学に直接貢献するネットワーク型共同研究、③国際共同研究といった共同利用・共同研究を推進しています。

共同利用・共同研究を通じた大学とのかかわり ①

自然科学研究機構は、大学共同利用機関法人として、全国の国公立大学や研究機関等から積極的に多くの研究者を受け入れ、共同利用・共同研究を進めています。また、総合研究大学院大学（総研大）の基盤機関として大学院教育を行うとともに、国公立大学の要請に応じて、大学院学生を「特別共同利用研究員」として受け入れ研究指導を行っています。共同利用・共同研究や特別共同利用研究員制度を通じて、大学等の研究者の研究を支援することで、大学の研究力強化に貢献しています。

大学への貢献を可視化

「大学の研究力強化への貢献」に対する一つの指標として、共同利用・共同研究の成果論文の被引用数分析を行っています。2018年以降5年間を対象に、自然科学研究機構と日本の大学等との共同利用・共同研究成果を分析しました。結果、自然科学研究機構が共同利用・共同研究

で携わった論文の中で、被引用数が全論文の上位10%以内にある高インパクト論文（Top10%論文）の割合は12.0%となりました。これは、日本の総論文からみたTop10%論文割合8.1%と比べても高いことを示しています。つまりこの結果は、自然科学研究機構が日本の大学における研究力強化に大きく貢献していることを示していると言えます。

NINSと日本の大学等との共同利用・共同研究論文数

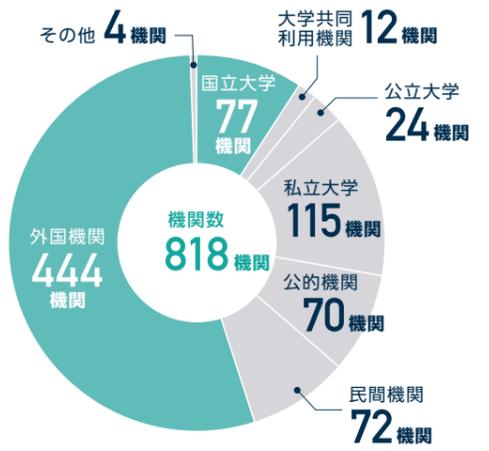


InCites調べ 対象期間：2018-2022

日本の総論文



共同利用の実績 (2022年度)



自然科学研究機構は、毎年多くの国公立大学や研究機関等から、共同利用研究者を受け入れています。全国の国立大学の約9割以上が自然科学研究機構での共同利用を利用しているだけでなく、近年は公立私立大学や、海外の大学・研究機関の利用も増加傾向にあります。



各研究所受入人数 (2022年度)

研究所名	利用人数	(うち)外国人	機関数
国立天文台	4,901人	55人	473 機関
核融合科学研究所	1,576人	274人	271 機関
基礎生物学研究所	479人	15人	94 機関
生理学研究所	827人	56人	153 機関
分子科学研究所	2,980人	209人	185 機関
センター等	344人	28人	101 機関

大学院教育 (受け入れ学生数)

総合研究大学院大学（総研大）の基盤機関として、大学院教育を実施しています。また、全国の国公立大学からも、特別共同利用研究員等として大学院学生（修士・博士）を受け入れています。



右の円グラフは 2022年度実績

公立大学ごとの研究者数+論文数

大学	受入人数 (2022年度)	論文数 (2018-2022)
大阪公立大学	103	252
名古屋市立大学	64	121
兵庫県立大学	42	101
東京都立大学	37	101
京都府立大学	23	12
静岡県立大学	20	16
横浜市立大学	9	54
県立広島大学	6	—

大学	受入人数 (2022年度)	論文数 (2018-2022)
山陽小野田市立山口東京理科大学	4	3
尾道市立大学	3	35*
秋田県立大学	3	8
京都府立医科大学	3	21
福島県立医科大学	3	17
和歌山県立医科大学	3	4
広島市立大学	3	—
岐阜薬科大学	2	—

大学	受入人数 (2022年度)	論文数 (2018-2022)
奈良県立医科大学	2	7
会津大学	1	38
公立諏訪東京理科大学	1	6
公立ほごだて未来大学	1	1
高知工科大学	1	6
新潟県立看護大学	1	1*
京都市立芸術大学	1	—
北九州市立大学	1	1

私立大学ごとの研究者数+論文数

大学	受入人数 (2022年度)	論文数 (2018-2022)
早稲田大学	110	187
慶應義塾大学	83	160
東京理科大学	57	104
立命館大学	52	77
関西学院大学	40	80
日本大学	36	147
名城大学	32	15
中部大学	30	52
北里大学	28	82
立教大学	27	106
法政大学	23	64
千葉工業大学	19	63
東海大学	19	37
学習院大学	18	34
京都産業大学	17	99
近畿大学	17	74
日本女子大学	16	17
藤田医科大学	14	37
福岡大学	13	94
中央大学	13	32
長浜バイオ大学	13	10*
埼玉工業大学	13	2
東京慈恵会医科大学	12	7
明治大学	11	26
産業医科大学	10	21
玉川大学	10	12*
東邦大学	10	88
自治医科大学	9	51
順天堂大学	9	19
東洋大学	8	19
東京電機大学	8	6
甲南大学	7	87
光産業創成大学院大学	7	14*
帝京大学	7	8
豊田工業大学	7	14
同志社大学	6	33
上智大学	6	22
大阪工業大学	6	41
沖縄科学技術大学院大学	6	19
明治国際医療大学	6	2*
桐蔭横浜大学	6	—
青山学院大学	5	53
神奈川大学	5	24

大学	受入人数 (2022年度)	論文数 (2018-2022)
摂南大学	5	6
愛知工業大学	5	—
関西大学	5	12
北海道科学大学	5	3
関西医科大学	5	7
湘南医療大学	5	—
東京農業大学	5	9
岡山理科大学	4	30
放送大学	4	39*
神戸薬科大学	4	5
岩手医科大学	4	12
昭和大学	4	12
星薬科大学	4	1
東北医科薬科大学	4	6
兵庫医科大学	4	8
豊橋創造大学	4	1*
北海道医療大学	4	—
龍谷大学	4	53
工学院大学	3	39
明星大学	3	33
大妻女子大学	3	20*
芝浦工業大学	3	22
東京都市大学	3	40
帝京科学大学	3	6*
東京薬科大学	3	10
徳島文理大学	3	16
日本工業大学	3	—
健康科学大学	3	—
久留米大学	2	18
京都女子大学	2	4
駒澤大学	2	5*
大阪産業大学	2	43
足利大学	2	7*
福井工業大学	2	9
福岡工業大学	2	3
国際医療福祉大学	2	4
東京工科大学	2	24
北海学園大学	2	3
大同大学	2	2*
朝日大学	2	—
愛知医科大学	2	26
杏林大学	2	8
新潟医療福祉大学	2	—

大学	受入人数 (2022年度)	論文数 (2018-2022)
神奈川工科大学	2	11
帝京平成大学	2	—
東京女子医科大学	2	12
東京通信大学	2	—
東北福祉大学	2	—
青森大学	2	—
愛知学院大学	2	2
創価大学	2	2
星槎大学	1	—
北海道情報大学	1	2*
関東学院大学	1	8
四国学院大学	1	—
成蹊大学	1	4
岐阜聖徳学園大学	1	2*
九州共立大学	1	1
中京学院大学	1	1*
女子栄養大学	1	—
日本医療大学	1	—
岐阜医療科学大学	1	1*
新潟工科大学	1	7*
大和大学	1	—
広島工業大学	1	2
上武大学	1	—
日本薬科大学	1	—
麻布大学	1	3
愛知学泉大学	1	—
京都薬科大学	1	5
金沢医科大学	1	4
人間総合科学大学	1	—
川崎医科大学	1	2
中京大学	1	2
日本医科大学	1	4
武庫川女子大学	1	—
武蔵野大学	1	—
九州産業大学	1	4*
埼玉医科大学	1	8
就実大学	1	—
城西国際大学	1	—
静岡理工科大学	1	—
北陸大学	1	—
名古屋文理大学	1	—
獨協医科大学	1	4

国立大学ごとの研究者数+論文数

大学	受入人数 (2022年度)	論文数 (2018-2022)
東京大学	757	2,354
名古屋大学	448	1,132
大阪大学	387	786
京都大学	383	1,169
東北大学	324	667
北海道大学	191	407
九州大学	181	443
東京工業大学	144	421
広島大学	136	394
神戸大学	127	165
筑波大学	114	328
静岡大学	80	85
総合研究大学院大学	79	1,886
千葉大学	76	148
山形大学	74	70
岡山大学	65	119
名古屋工業大学	64	68
岐阜大学	57	61
富山大学	57	217
鹿児島大学	54	178
新潟大学	49	137
愛媛大学	48	221
茨城大学	47	108
横浜国立大学	44	53
京都工芸繊維大学	44	36
群馬大学	43	43
埼玉大学	41	73
弘前大学	40	93
電気通信大学	37	90
奈良先端科学技術大学院大学	35	45
奈良女子大学	34	58
福井大学	31	43
金沢大学	30	90
信州大学	29	87
徳島大学	29	58
山口大学	28	51
鳥取大学	26	27
島根大学	20	34
愛知教育大学	18	14

大学	受入人数 (2022年度)	論文数 (2018-2022)
佐賀大学	18	17
熊本大学	17	73
宇都宮大学	17	27
豊橋技術科学大学	17	24
宮崎大学	13	21
三重大学	11	40
九州工業大学	10	22
長岡技術科学大学	10	56
お茶の水女子大学	10	23
東京医科歯科大学	10	20
旭川医科大学	9	5
和歌山大学	9	2
琉球大学	8	50
北見工業大学	7	54
室蘭工業大学	7	8
長崎大学	7	16
高知大学	7	37
大分大学	6	27
東京農工大学	6	63
岩手大学	6	12
北陸先端科学技術大学院大学	6	12
上越教育大学	4	16
山梨大学	4	27
香川大学	3	54
一橋大学	2	13
福島大学	2	9
滋賀医科大学	2	15
秋田大学	2	4
奈良教育大学	2	5
東京海洋大学	2	4
滋賀大学	1	6
筑波技術大学	1	3
北海道教育大学	1	10*
鳴門教育大学	1	3
福岡教育大学	1	—
宮城教育大学	1	6
東京学芸大学	1	33
浜松医科大学	1	8

- 論文数は、2018-2022年の総計を対象としており、共同利用・共同研究者から報告された成果論文、およびクラリベイト・アナリティクス社研究分析ツールInCitesで検索したNINS研究者が著者に含まれる論文をカウントしています。
- ※は、InCitesに所属登録が無い機関について、エルゼビア社論文データベースScopusで論文を検索し、カウントしています。

自然科学研究機構は、日本全国の国立大学だけでなく、多くの公立私立大学から幅広く研究者を受け入れ、共同利用・共同研究を進めています。共同利用・共同研究の結果、各大学から多くの研究成果論文が発表されています。

共同利用・共同研究を通じた大学とのかかわり ②

共同利用・共同研究を通じた大学とのかわり ③

自然科学研究機構は、文部科学省の大規模学術フロンティア促進事業並びに学術研究基盤事業において4つの大型国際プロジェクトを実施しています(①大型光学赤外線望遠鏡であるすばる望遠鏡の共同利用研究、②大型電波干渉計であるアルマ望遠鏡による国際共同利用研究の推進、③30メートル光学赤外線望遠鏡(TMT)計画の推進、④超高温プラズマ学術研究基盤(LHD)計画)。これら最先端の大型研究装置により、研究活動の共通基盤を提供するとともに、世界の学術研究を先導し、国際研究拠点を形成しています。

大型国際プロジェクト



アルマ望遠鏡

国立天文台が国際協力の下で運営する「アルマ望遠鏡」



大型ヘリカル装置

超高温プラズマの研究で世界を先導する「大型ヘリカル装置」



すばる望遠鏡

超広視野・超高解像度観測で宇宙を俯瞰する「すばる望遠鏡」



TMT計画

国立天文台が推進する「TMT計画」

プロジェクト関連数値データ(2023年度)

大型国際プロジェクト名	利用者数 (延べ人数)	(うち)外国人数	機関数	国数
すばる望遠鏡	271人	70人	46機関	11ヶ国
アルマ望遠鏡	3,819人	3,393**人	362機関	38ヶ国
大型ヘリカル装置	395人	156人	84機関	18ヶ国

** 外国機関に所属する日本人研究者を含む

研究大学コンソーシアムの運営

自然科学研究機構は、大学の研究力向上に貢献するため様々な活動を行っています。その一環として、研究力強化に積極的に取り組む大学によって組織された「研究大学コンソーシアム(Research University Consortium)」の幹事機関を務めています。「研究大学コンソーシアム」は現在、41大学で構成され、タスクフォース(TF)活動、シンポジウムやホームページなどを通じて、大学間に共通する諸々の課題について、好事例などさまざまな情報の発信と共有、討議を行っています。

具体的な活動

① エビデンスに基づく分野をこえた研究連携に関するTF

分野融合・組織間連携の推進に向けて、各大学の研究力の特徴を多角的な視点で把握するため、必要となる関連情報・エビデンスの収集と共有、分析を目的とします。分野や機関の枠をこえた連携による研究力強化を進めるため、課題を整理し、必要となる調査(エビデンス収集)や分析を行います。

② 大学間連携による研究基盤強化TF

大学と大学共同利用機関が連携し、大学間連携による研究力強化を進めるための研究基盤の強化に関する議論を行います。自然科学研究機構・大学間設備ネットワーク事業との連携も図っていきます。

③ 連絡会

喫緊の課題など特定のトピックに関する情報共有を進めます。(トピック例:研究力分析、国際情報発信、学術情報流通等)

④ MIRAI-DX

MIRAI-DXとは、リサーチ・アドミニストレーター(University Research Administrator: URA)の協働による分野や機関の枠をこえたDXプラットフォームです。MIRAI-DXを用いて、分野や機関の枠をこえた連携を推進していきます。中心的な役割を担う7大学・機関(CORE)において、プラットフォームの運用に関する検討を行っています。

シンポジウム

研究大学コンソーシアムに参加するすべての大学が集まり、年1回程度、シンポジウムを開催しています。研究力強化の方策・体制の整備等に関する研究大学群として共通する課題について、先導的な取り組みや好事例などの共有を含め、横断的に議論しています。



構成機関 (41大学・機関)

- 北海道大学
- 東北大学
- 筑波大学
- 千葉大学
- 東京大学
- 東京医科歯科大学
- 東京農工大学
- 東京工業大学
- 電気通信大学
- 一橋大学
- 横浜国立大学
- 新潟大学
- 富山大学
- 金沢大学
- 福井大学
- 信州大学
- 名古屋大学
- 名古屋工業大学
- 豊橋技術科学大学
- 京都大学
- 大阪大学
- 神戸大学
- 岡山大学
- 広島大学
- 山口大学
- 徳島大学
- 愛媛大学
- 九州大学
- 九州工業大学
- 長崎大学
- 熊本大学
- 鹿児島大学
- 北陸先端科学技術大学院大学
- 奈良先端科学技術大学院大学
- 東京都立大学
- 早稲田大学
- 慶應義塾大学
- 人間文化研究機構
- 自然科学研究機構
- 高エネルギー加速器研究機構
- 情報・システム研究機構



OPEN MIX LAB (OML) 事業

新たな学術分野を切り拓く場の提供

自然科学研究機構では2023年度よりオープンミックスラボ(OML: Open Mix Lab) 事業を開始しました。OML事業は組織、セクター、学術分野を跨いだ分野融合・学際研究を推進するための研究プラットフォームとして構想されており、多様な研究プロジェクトを通じて先進的な研究成果を創出するとともに、新たな学術分野を切り拓く場を提供することが期待されています。

OML事業のしくみ

OML事業は大きく分けて公募研究プログラムと施設整備から構成されています。OML公募研究プログラムは従来から機構が実施してきた公募プログラムを統合・再編するかたちで発足しました。OML公募研究プログラムには以下の5つのタイプがあり、研究プロジェクトの進捗や規模に合わせたタイプを選択できるようになっています。

特定のテーマに沿った研究プロジェクトを公募する「テーマ設定型」が設けられたことは、従来の機構内公募プログラムにはなかったOML公募研究プログラムの特色で

す。今後も年度毎に新たなテーマを設定して公募を実施する予定ですが、来年度以降は機構内の意見を集約しテーマ設定に反映する仕組みを構築していく計画です。

公募研究プログラムと並んでOML事業の柱となる施設整備については、自然科学研究機構山手キャンパス(岡崎市)に最初のOML施設の整備を進めべく調整中です。機構内外の研究者が分野融合研究や課題解決型研究連携を実施する拠点として整備される予定です。



※いずれも2024年度公募は終了しています。

- ① 研究共創型
- ② 若手支援型
- ③ テーマ設定型
- ④ 研究スタートアップ支援型
- ⑤ 産学連携支援型

OML公募研究プログラムメニュー

① 研究共創型

自然科学研究機構(NINS)を含む、国内の研究機関に所属する研究者等が対象。職員と協力し実施する、組織間連携による革新的な研究を支援するためのプロジェクトです。

② 若手支援型

NINSに所属する若手研究者が対象。国内の研究機関に所属する研究者等と協力し実施する、組織間連携による革新的な研究を支援するためのプロジェクトです。

③ テーマ設定型

NINSを含む、国内の研究機関・民間企業等に所属する研究者等が

2024-2025年度のテーマ

テーマ1

「全波長域の光を用いた解析・分析技術開発とその応用(従来あまり使われていなかった波長域の活用)」

テーマ2

「GXに資する基礎研究開発(蓄電池、水素、バイオモブグリ)」

テーマ3

「AI・機械学習・数理を活用した基礎および応用研究」

④ 研究スタートアップ支援型

NINSを含む国内の研究機関に所属する研究者等が対象。NINSに所属する職員と協力し、組織間連携による革新的な研究を立ち上げるためのスタートアップ研究や、ワークショップ、予備調査を支援するためのプロジェクトです。

⑤ 産学連携支援型

NINSに所属する研究者が対象。社会課題の解決や産業応用を志向したフィージビリティ・スタディを支援するためのプロジェクトです。

具体的な支援規模や応募要件については機構のウェブサイトに掲載されている募集要領をご参照ください。



<https://www.nins.jp/collabo/oml.html>

自然科学研究機構事務局研究協力課研究支援係

TEL.03-5425-1318

Email.nins-jr@nins.jp

お問い合わせ先

国際共同研究の推進

国際的学術拠点の形成

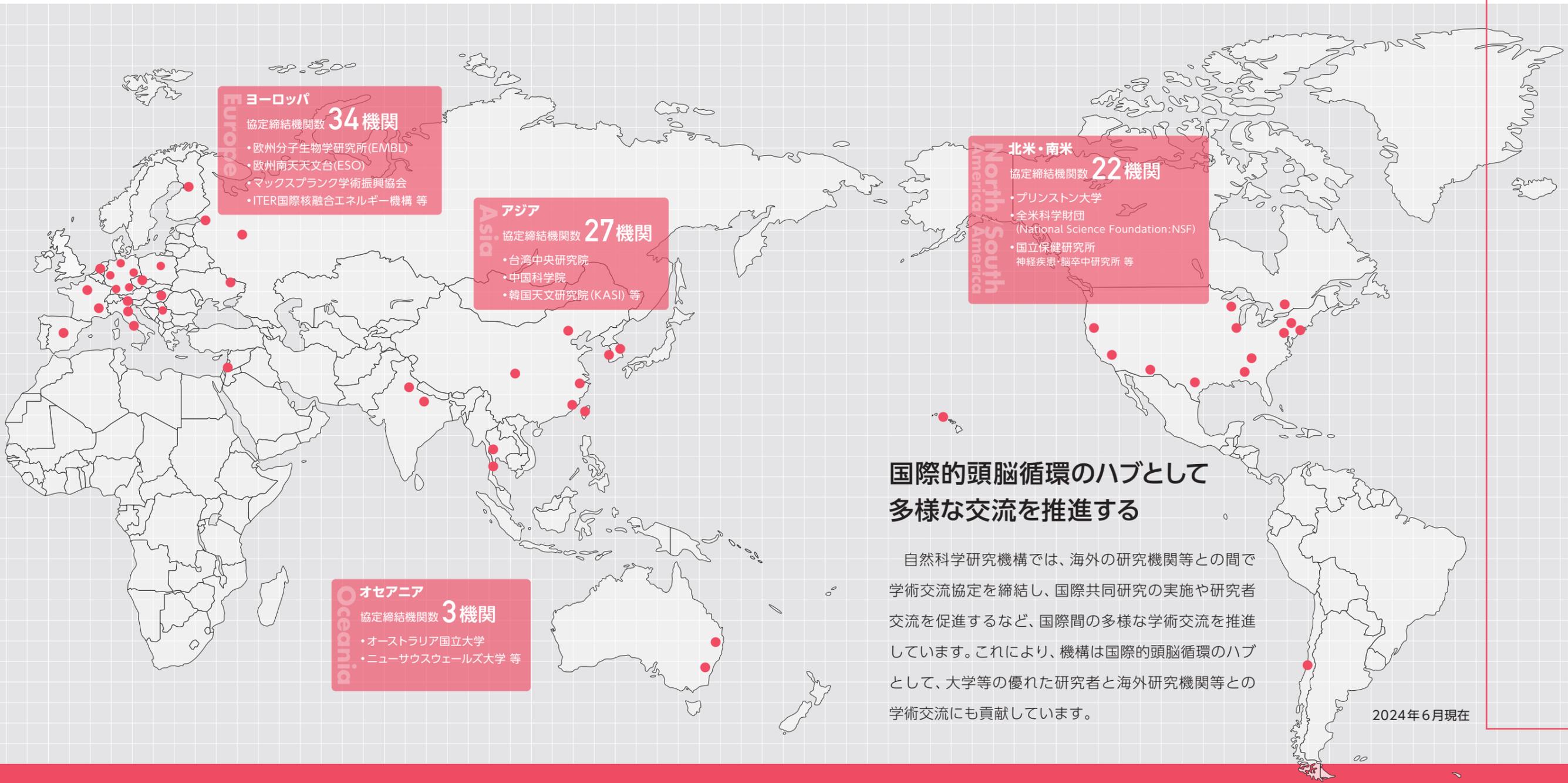
プリンストン大学及び
マックスプランク協会傘下の
研究所との連携

自然科学研究機構とプリンストン大学(アメリカ)は2010年より学術交流協定を締結し、プラズマ宇宙物理学及び定量・イメージング生物学分野の共同研究や教育活動支援、会議・シンポジウム等への相互参加などさまざまな交流を行っています。また、マックスプランク協会(ドイツ)傘下の研究所の間でも、機構協定に基づきプラズマ物理学及び天体物理学分野を中心とした研究交流を進めています。い

れも国際共同事業を促進する枠組みを強化するため、国際連携担当URAの支援の下、国際公募により採用した研究者を現地に配置しています。

欧州分子生物學研究所
(European Molecular Biology
Laboratory: EMBL)
との国際連携

EMBLはドイツのハイデルベルグに本部を置く、EU諸国を中心とした19ヶ国からの出資によって運営されている国際研究機関です。自然科学研究機構とEMBLは2005年に締結した学術協定に基づき、学術交流と人材交流、技術交流の3方面による交流を行っています。自然科学研究機構からは、主にEMBLと最も近い研究分野を担う基礎生物学研究所が中心となり、共同研究を推進しています。



国際的頭脳循環のハブとして
多様な交流を推進する

自然科学研究機構では、海外の研究機関等との間で学術交流協定を締結し、国際共同研究の実施や研究者交流を促進するなど、国際間の多様な学術交流を推進しています。これにより、機構は国際的頭脳循環のハブとして、大学等の優れた研究者と海外研究機関等との学術交流にも貢献しています。

2024年6月現在

NINSの産学連携について

NINSの目指す産学連携

自然科学研究機構（NINS）は、全国の国公私立大学や研究機関に所属する研究者のための学術研究の中核拠点となる大学共同利用機関法人のひとつです。各々の大学では維持・管理が困難な最先端の研究施設や研究機器、膨大な学術資料などの知的基盤、そしてこれらを利用する上で必要な知識を持つ人的リソースを有し、全国の研究者へ共同研究や分野開拓の場を提供しています。NINSは創設以降、これらの先導的かつ効果的な共同研究活動の実施によって、日本の学術研究の発展に貢献するとともに、大学共同利用機関としての使命

を果たしてきました。NINSは今、我々の積み重ねてきた歴史と実績をもって、日本の産業界を担う皆様の研究ニーズに応えていきたいと考えています。



NINSが産業界に求めること

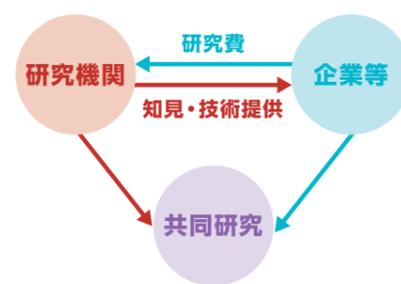
- ▶ 我々の研究成果を社会に還元したい
- ▶ 日本の産業界が持つ課題やニーズを参考にしたい
- ▶ 社会が科学に求めている要望に触れたい

企業がやりたいこと(例)

- ▶ 新製品の効果について科学的な裏付けが欲しい
- ▶ 開発にあたり基礎的な研究の知見を得たい
- ▶ 最先端研究から新しいアイデアを得たい
- ▶ 大型研究機器を利用したい

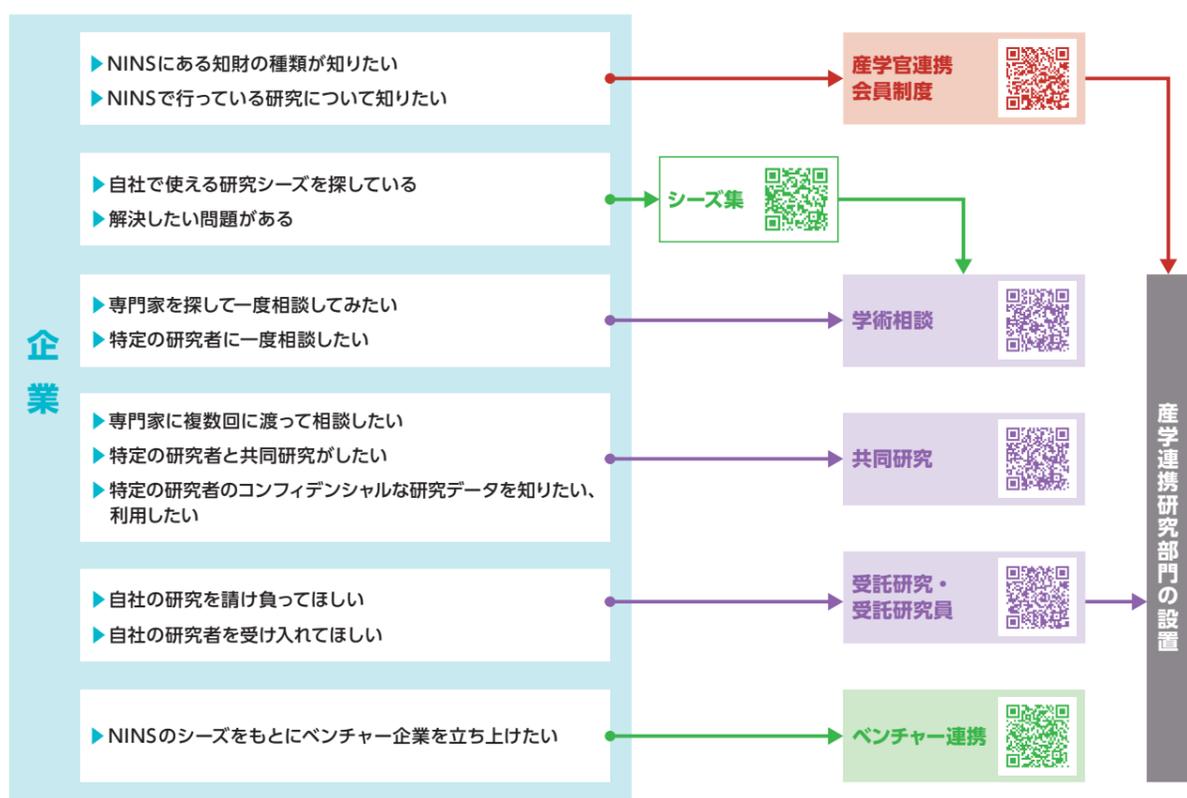
産学連携のしくみ

NINSが実施する学術研究の成果を産業界で活用していただくとともに、産業界のニーズに応える研究開発を行います。NINSでは学術相談、共同研究、受託研究等の契約に基づいて産学連携を推進しています。また産業界とのネットワーク醸成を目的としてNINS産学連携会員制度を運用しています。詳細はNINSの産学連携制度をご参照ください。



NINSの産学連携制度

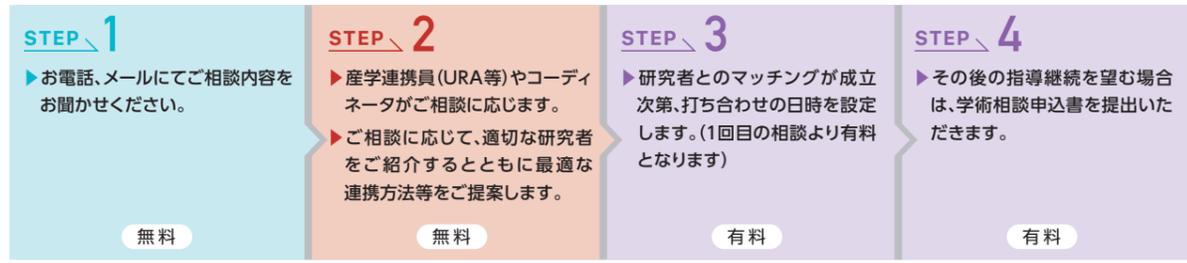
NINSでは学術相談、共同研究、受託研究等の契約に基づいて産学連携を推進しています。また産業界とのネットワーク醸成を目的としてNINS産学官連携会員制度を運用しています。



※機構のライセンスの使用・知的財産および機関の設備・共用機器利用については産学連携担当にご相談ください。

産学連携の受け入れフロー

NINSとの共同研究等を希望される場合には事前に担当研究者もしくは産学連携担当までご相談ください。ご要望に応じて学術相談や共同・受託研究契約等の手続きをご案内させていただきます。



お問い合わせ先 自然科学研究機構事務局研究協力課研究支援係
 TEL.03-5425-1318
 Email.nins-sangaku@nins.jp
<https://innovation.nins.jp/>

国民・地域とのつながり

自然科学研究機構では、最先端研究成果などの情報発信を通じた国民の皆さんとの対話や、地域の皆さんとのつながりに積極的に取り組んでいます。

自然科学研究機構

若手研究者賞受賞記念講演

自然科学研究機構では、新しい自然科学分野の創成に熱心に取り組み成果をあげた優秀な若手研究者を対象として毎年「自然科学研究機構若手研究者賞」を授与しています。本賞の授賞式に伴い、受賞者らによる講演会を開催しています。様々な分野の最先端の研究について紹介する、高校生から大人

までお楽しみいただける一般講演です。また講演会終了後には、受賞者全員とファシリテーターによる研究者トークが行われます。参加者からの質問に答えながら、科学者を目指したきっかけや研究の10年後の未来について予測するなど、刺激的な意見交換が行われています。

科学記者・メディアとのつながり

科学記者やメディアの皆様に向けて、自然科学研究に関する最新



のトピックスを紹介するための「機構長プレス懇談会」を開催しています。懇談会では、最新の研究成果を発表したばかりの研究者たちが登壇し、研究分野に関するセミナーや意見交換を実施します。

研究所一般公開

自然科学研究機構の5つの研究機関では、定期的に一般公開を開催しています。第一線で活躍する研究者や技術職員から、各研究機関が担う最先端の研究成果や、実際に日々運用されている最先端設備などを実際に見学・体験することができます。

自然科学研究機構シンポジウムの開催

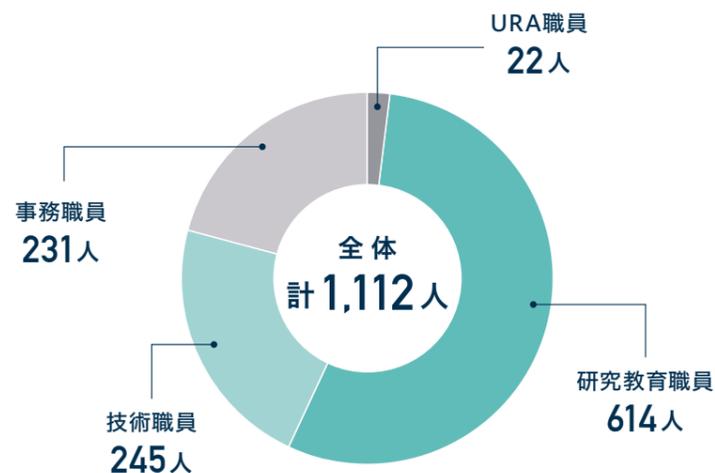
自然科学研究機構はこれまで、天文学、核融合科学、分子科学、生物学、医学生理学などの研究に加え、分野を越えた融合研究の場を積極的に創成し、自然科学研究の新分野開拓を推進してきました。自然科学研究機構が担う自然科学研究分野の意義や楽しさを、より多くの皆様へいち早くお届けするべく、私たちは自然科学研究機構シンポジウムを開催しています(年2回)。

開催回	開催日	テーマ	場所
第38回	2024/10/20	量子はめぐる -量子科学技術で創造する未来-	一橋講堂 (学術総合センター2階) (ハイブリッド開催)
第37回	2024/ 2 /23	生物界にも 分子や数学によって生成される 秘密のルールがあるのだろうか!?	国立科学博物館 日本館 講堂 (ハイブリッド開催)
第36回	2023/ 9 /24	データ蒐集家と散策する -ビッグデータと人は どのように寄り添って生きていくか-	多摩六都科学館 (ハイブリッド開催)
第35回	2023/ 3 /12	自然の中に潜む 不確実性とは何か? ~科学の目で見た持続可能性~	東京大学大講堂(安田講堂) (ハイブリッド開催)
第34回	2022/ 9 /25	性差について考えよう ~生命から社会まで~	一橋講堂 (学術総合センター2階) (ハイブリッド開催)
第33回	2022/ 3 /13	宇宙と、分子と、私たち	オンライン開催
第32回	2021/ 8 /21	生命科学とプラズマ工学が つくる未来	日本橋ライフサイエンス ビルディング2階 (ハイブリッド開催)
第31回	2021/ 3 /13	生きているとは何か?	オンライン開催
第30回	2020/ 9 /26	宇宙科学と生命科学の 深~いつながり	オンライン開催
第29回	2020/ 3 /14	秘められた力を引き出す ~体・心・運動~	新型コロナウイルスの 感染拡大の影響により中止



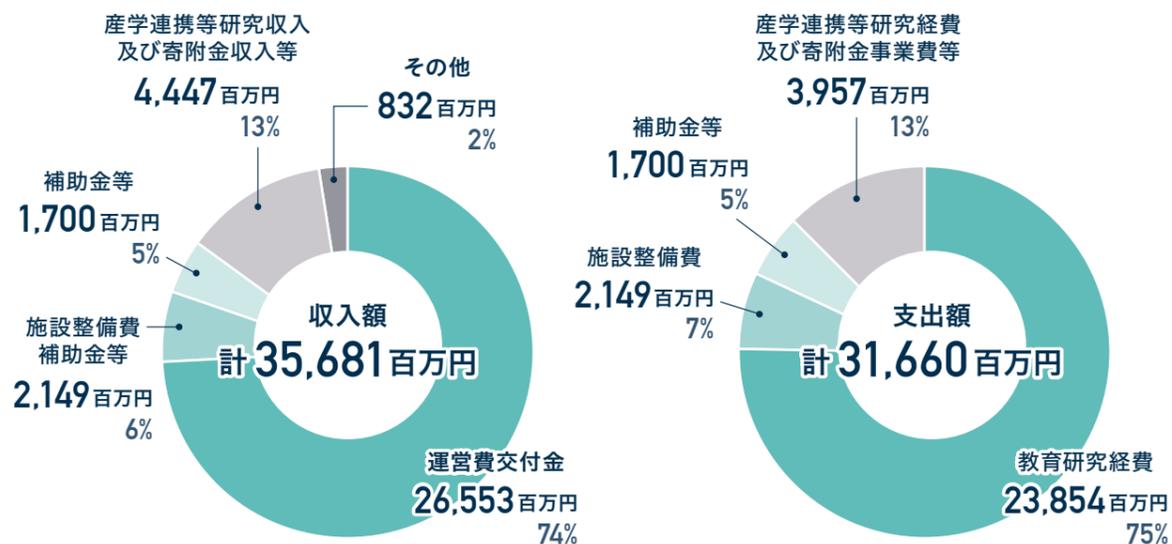
大隅良典先生 ノーベル賞受賞記念
大隅良典自然科学研究機構
特別荣誉教授は、基礎生物学研究所における13年間の研究を含めた「オートファジー」研究の成果により、2016年ノーベル生理学・医学賞を受賞しました。この功績を記念し、「酵母細胞のオートファジー」をモチーフとした記念のモニュメントが、基礎生物学研究所に設置されています。

大隅良典特別荣誉教授
ノーベル賞受賞および
記念モニュメント

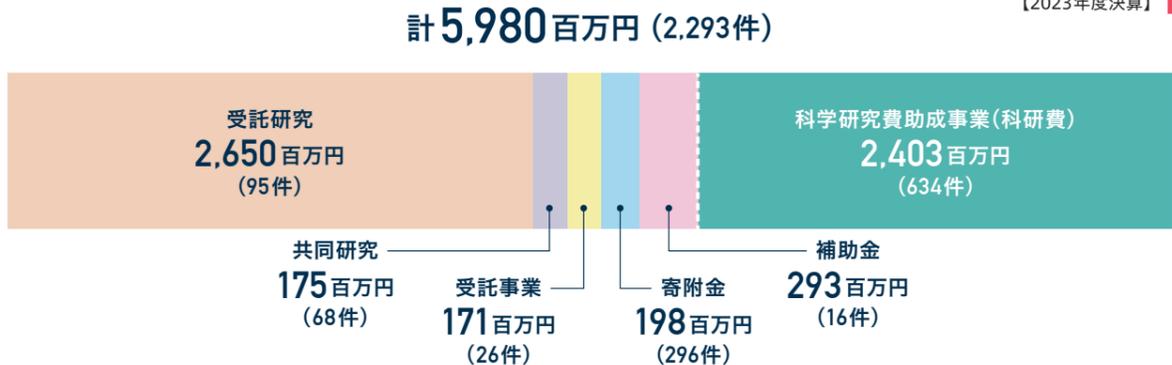


職員数
2024年4月1日現在

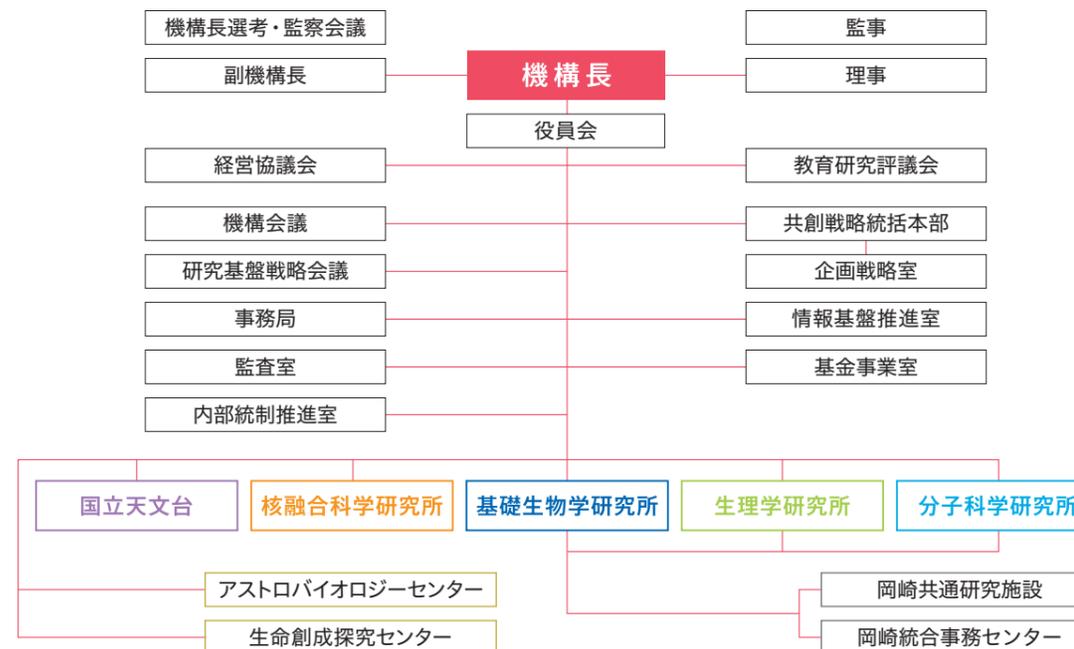
収入と支出
【2023年度決算】



外部資金等の内訳
【2023年度決算】



※端数整理(百万円未満切り捨て)のため、項目ごとの合計は総合計と一致しない場合があります。



国立天文台	核融合科学研究所	基礎生物学研究所	生理学研究所	分子科学研究所
<ul style="list-style-type: none"> ●1888(明治21年) 東京大学理学部に東京天文台 発足 ●1924(大正13年) 麻布飯倉から三鷹へ移転 ●1988(昭和63年) 大学共同利用機関 国立天文台 発足 	<ul style="list-style-type: none"> ●1989(平成元年) 大学共同利用機関 核融合科学研究所 発足 ●1997(平成9年) 名古屋市から土岐市に移転 	<ul style="list-style-type: none"> ●1977(昭和52年) 大学共同利用機関 基礎生物学研究所 発足 ●1977(昭和52年) 生物学総合研究機構 発足 	<ul style="list-style-type: none"> ●1977(昭和52年) 大学共同利用機関 生理学研究所 発足 ●1981(昭和56年) 岡崎国立共同研究機構 発足 	<ul style="list-style-type: none"> ●1975(昭和50年) 大学共同利用機関 分子科学研究所 発足
<ul style="list-style-type: none"> ●2004(平成16年) 大学共同利用機関法人 自然科学研究機構 設立 				
<ul style="list-style-type: none"> ●2009(平成21年) 新分野創成センター 設立 				
<ul style="list-style-type: none"> ●2013(平成25年) 研究力強化推進本部 設立 				
<ul style="list-style-type: none"> ●2015(平成27年) アストロバイオロジーセンター 設立 ●2018(平成30年) 生命創成探究センター 設立 (岡崎統合バイオサイエンスセンター改組) 国際連携研究センター 設立 				
<ul style="list-style-type: none"> ●2020(令和2年) 動物資源共同利用研究センター設立 (動物実験センター改組) 				
<ul style="list-style-type: none"> ●2023(令和5年) 共創戦略統括本部 設立 (研究力強化推進本部、新分野創成センター、国際連携研究センター改組) 				

自然科学研究機構

自然科学研究機構本部

National Institutes of Natural Sciences

〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-3-13
ヒューリック神谷町ビル2F
TEL. 03-5425-1300(代表)
FAX. 03-5425-2049
https://www.nins.jp/



NINS

国立天文台

National Astronomical Observatory of Japan

〒181-8588
東京都三鷹市大沢2-21-1
TEL. 0422-34-3600(代表)
FAX. 0422-34-3690
https://www.nao.ac.jp/



NAOJ

核融合科学研究所

National Institute for Fusion Science

〒509-5292
岐阜県土岐市下石町322-6
TEL. 0572-58-2222(代表)
FAX. 0572-58-2601
https://www.nifs.ac.jp/



NIFS

アストロバイオロジーセンター

Astrobiological Center

〒181-8588
東京都三鷹市大沢2-21-1
TEL. 0422-34-4072
E-mail. abc-pub@abc-nins.jp
https://www.abc-nins.jp/



ABC

基礎生物学研究所

National Institute for Basic Biology

〒444-8585
愛知県岡崎市明大寺町字西郷中38
TEL. 0564-55-7652
FAX. 0564-53-7400
https://www.nibb.ac.jp/



NIBB

生理学研究所

National Institute for Physiological Sciences

〒444-8585
愛知県岡崎市明大寺町字西郷中38
TEL. 0564-55-7700
FAX. 0564-52-7913
https://www.nips.ac.jp/



NIPS

分子科学研究所

Institute for Molecular Science

〒444-8585
愛知県岡崎市明大寺町字西郷中38
TEL. 0564-55-7418
FAX. 0564-54-2254
https://www.ims.ac.jp/



IMS

生命創成探究センター

Exploratory Research Center on Life and Living Systems

〒444-8787
愛知県岡崎市明大寺町東山5-1
E-mail. info@excells.orion.ac.jp
https://www.excells.orion.ac.jp/



EXCELLS

2024年9月現在

機構長

氏名	職名
川合 眞紀	機構長

監事

氏名	職名
小川 雄一	監事
植草 茂樹	監事

教育研究評議会評議員

氏名	職名
伊藤 公孝	中部大学総長補佐・顧問
井上 和秀	九州大学高等研究院特別主幹教授
魚崎 浩平	科学技術振興機構研究開発戦略センター上席フェロー 北海道大学名誉教授 物質・材料研究機構名誉フェロー・アドバイザー
小谷 元子	東北大学理事・副学長
高橋 淑子	京都大学理学研究科教授
永田 敬	総合研究大学院大学学長
永原 裕子	東京工業大学地球生命研究所フェロー
早坂 忠裕	東北大学大学院理学研究科教授 JAXA地球観測研究センター参与
福田 裕穂	秋田県立大学理事長・学長
川合 眞紀	自然科学研究機構機構長
井本 敬二	自然科学研究機構理事
古屋 輝夫	自然科学研究機構理事
岡本 和久	自然科学研究機構理事・事務局長
高柳 英明	自然科学研究機構理事
土居 守	自然科学研究機構国立天文台長
吉田 善章	自然科学研究機構核融合科学研究所長
阿形 清和	自然科学研究機構基礎生物学研究所長
鍋倉 淳一	自然科学研究機構生理学研究所長
渡辺 芳人	自然科学研究機構分子科学研究所長
吉田 道利	自然科学研究機構国立天文台副台長
藤堂 泰	自然科学研究機構核融合科学研究所副所長
皆川 純	自然科学研究機構基礎生物学研究所副所長
久保 義弘	自然科学研究機構生理学研究所副所長
山本 浩史	自然科学研究機構分子科学研究所研究総主幹

理事・副機構長

氏名	職名
井本 敬二	理事・共創戦略統括本部長
古屋 輝夫	理事
岡本 和久	理事・事務局長
吉田 善章	理事・副機構長・核融合科学研究所長
阿形 清和	理事・副機構長・基礎生物学研究所長
高柳 英明	理事
土居 守	副機構長・国立天文台長
鍋倉 淳一	副機構長・生理学研究所長
渡辺 芳人	副機構長・分子科学研究所長

経営協議会委員

氏名	職名
石原 修	中部大学名誉教授(元学長) 横浜国立大学名誉教授
長我部 信行	株式会社日立ハイテクコアテクノロジー & ソリューション事業統括本部 エグゼクティブアドバイザー
篠田 謙一	独立行政法人国立科学博物館館長
角南 篤	笹川平和財団理事長 政策研究大学院大学学長特命補佐/客員教授
隅田 英子	慶應義塾グローバル本部事務局長
滝 順一	日本科学技術ジャーナリスト会議理事
田島 保英	一般財団法人高度情報科学技術研究機構理事長
中釜 齊	国立がん研究センター理事長
中西 友子	東京大学名誉教授、特任教授
長谷川 眞理子	独立行政法人日本芸術文化振興会理事長 学校法人富澤学園理事長 山形大学名誉教授(元学長) 元文部科学事務次官
結城 章夫	山形大学名誉教授(元学長) 元文部科学事務次官
川合 眞紀	自然科学研究機構機構長
井本 敬二	自然科学研究機構理事
古屋 輝夫	自然科学研究機構理事
岡本 和久	自然科学研究機構理事・事務局長
高柳 英明	自然科学研究機構理事
土居 守	自然科学研究機構国立天文台長
吉田 善章	自然科学研究機構核融合科学研究所長
阿形 清和	自然科学研究機構基礎生物学研究所長
鍋倉 淳一	自然科学研究機構生理学研究所長
渡辺 芳人	自然科学研究機構分子科学研究所長

自然科学研究機構 寄附
https://kikin.nins.jp/

自然科学研究機構では、研究活動の飛躍的向上とともに、若手人材育成のためにご寄附を募っております。どうぞ格別の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

ご寄附のお願い



自然科学研究機構 寄附

https://kikin.nins.jp/